

庚申信仰

秋月 觀 映

庚申信仰は、かつて我が國に行われた幾多の民間信仰の中に於いて、最も高度の地域的展布と社会的蔓延を示したばかりでなく、各種の珍奇な宗教的習俗・禁忌を伴う面目すべき信仰として、昔から特異な存在を保つて来た。ところが、この庚申信仰の思想的な起源は明らかでなく、右来この点に就いて幾つかの異つた所説が行われて来た。その第一は、室町時代 来の諸文献の上に数多く、散見するもので庚申待の信仰・習俗は中國の道教の説に基くとする見解であり、第二は、江戸時代の一部の神道家によつて主張せられたもので、庚申の祭を以て神武以来の伝統的な祭式であり、篠田彦の祭祀であるとなす

説である。更に近年に至つて、柳田國男氏を中心とする民俗学者によつて、庚申信仰を日本固有の信仰習俗と見なす第三の新たな見解が提出せられた。これに対して道教研究の専門家である著者は、かねて主として文化人類学の見地から、道教の三尸説と我が國の庚申待との間に構構る近似性に着目し、昭和廿九年七月「道教と日本の民間信仰」を民族学研究に発表して以来、昨年まで「日本に於ける庚申待」に「日本に伝来した三尸信仰」に「中國の三尸信仰」と日本の庚申信仰との論考を矢継早に発表、日本の庚申信仰の源が中國の道教、とくに三尸信仰にある事を主張して、学界の注目を集めたのであるが、今

因それらの論文を纏め、「いまの庚申待のやり方や信仰などを調査して、昔の名残りとおぼしきものをぬき出して書物の記述とてらしめわけて綜合し、その結果と中国のものをくらべて、そのあいだの異同をしらべる」事によつて、三戸、庚申両信仰のつながりを極めて平易な行文を以て解明したのが此の書物である。博引旁証に至らざるは本書の論証過程を辿りながら、著者の意図を誤りなく、更にこれに論評を加える事は拙文のよく果し得るところではないが、編輯子の斡めを辞し難いまゝに本書の内容の大綱と一ニの魁尾の詞陳を試み、以て書務を果たすことゝしたい。

さて本書は六章から成る本文約三〇〇頁と、約二十頁の付録・索引から成立つていて、まづ順を追つて極く簡単に、その内容を紹介しよう。

——庚申待の実例——こゝに於いて著者は自から全国を股にかけて行つた実態調査の結果から、天々農村（新潟県中条町興野）漁村（青森県小泊村折戸）都市（弘前市富田町）の庚申信仰の代表的ケース及び講を組織せず家毎に個別的に庚申の祭祀を行う特殊なケース（福井県美浜町麻生）の四例を選び、後

半に於ける行論の展開を準備しつゝ、天々のケースに見られる庚申の信仰・習俗の実態を具体的に紹介されている。こゝで注目してよい事は、これから四つ^の地方に於ける庚申信仰が天々のケースの間に横わる社会的・職業的或は地理的な距りを超えて、猶且その習俗・伝承の上に於いて多くの共通したものを有している事であるが、著者は次の——いまの庚申信仰——に於いて、これら共通点を重要な手懸りとなし、(1)庚申講の組織、(2)お庚申さん、(3)おつとめ(4)話は庚申の晩、(5)庚申待の縁起話、(6)塔と塚、など十一の項目を立てて全国的な調査結果を纏め、日本における現行庚申信仰の実態を誠に手際よく整理紹介されている。

——江戸時代以前の庚申待と信仰——こゝに於いて著者は平安時代以前の各種文献を丹念に調査検討し、従来問題とされていた日本に於ける庚申待の始まる時期を「仁明天皇の承和五年からあまり遠くさかのほらない平安時代の初めごろ、いいかえれば八世紀のおわりか九世紀の初めごろ」と推定する新たな見解を提起し、更に上は平安時代宮廷貴族の行つた庚申の「御遊び」から、下は江戸時代町民の庚

申待に及び日本の庚申信仰、習俗の時代的な変遷の跡を概観されている。

——中国の道教——こゝでは前二章と並んで本書の鼎足を形成する次章三尸説の理解を容易ならしめるべく、周到な配慮のもとに着者一流の道教概説が誠に要領よく叙述されている。

——三尸説とその信仰——こゝではまづ「人間の身体」のなかにいる三尸という三匹の虫が、庚申の夜に人がねているあいだに天に上って天の神に人の罪過をつげるといふ三尸説の中國における起源を考察して、三國時代か西晋ごろの一部の道士たちが、人間の身体のなかにいる寄生虫から思いつき、それと人間の靈魂が諸方を遊びあるいて善をたえるところ、および天に司命や司過の神々がいるという信仰などをまぜあわせてつくり上げたものと結論し、更に三尸説の内容、三尸の呼称、杖能、驅除法等について、膨大な部数にのぼる末兩折の道藏を駆使し、道藏に対する造詣の最も深い著者にして初めて可能なる克明なる整理分類を行つて居られる。

——庚申の信仰と三尸の信仰——讀むは結論とも

称すべき本章および結びに於いては、まづ一般的に鬼地に立つて道教の日本への伝承を確認してのち、当面の主題である道教の三尸信仰と日本の庚申待との関係の問題に入り、さきに究明された平安時代宮庭貴族の庚申待の中に内在する三尸説の存在を明確に別抉し、更に續く鎌倉、室町、江戸時代の庚申待に於ける三尸説及び三尸信仰の変遷を辿りつゝ、現行庚申待の中に遺る三尸説の諸要素に説き及び、日本の庚申信仰は過去に於ける幾多の形式的な変遷にも拘らず、常にその底に道教の三尸説や三尸信仰が横わっている事実が見出されると述べ、日本の庚申待の少なくとも一つの源流が道教とくに三尸の信仰にあると結論されている。

以上、具体的内容には殆ど觸れえなかつたが、原意の誤解を懼れながら、一應本書の大筋を紹介した心算りである。

この様な簡単な紹介によつても、既に察せられた事と思われるが、本書は単なる一時的な思いつきや机上の初級細工では断じてなく、著者が卓抜なる構想のもとに長年蓄積し縫けてきた中日・古今に通ず

る各種文献の丹念な調査研究、並びに全国各地に亘って実施した着実な実態調査結果を踏まえて完成された優れた文字通りの労作である。

従って本書には幾多の独創的な見解が示され居り、日本における庚申待の肇始の時期を推定された如き、袋草子以来の文献に載る「庚申せてのる誦文」中の「ししょうけら」の存在を、前掲麻生の現行庚申誦言の中に発見し、これを三戸の日本的呼称と断定された如き、或は庚申待の発展と修験道との不可分の関係を指摘せられた如きは、その一例に過ぎない。これら数多くの創見の上に立って、庚申信仰の実態を闡明されている事は、著者が全国的探訪によって得た数多くの貴重な関係文献資料の発見蒐集と共に没すべからざる大きな功績である。又その資料の一部が附録として、周到に作製された索引と並んで収録されている事は、吾々後学の研究に計り知れない便宜を提供するものがある。三戸説が中国に於いて、庚申信仰が日本に於いて夫々千年有余の歴史をもち、両国文化の形成の上に与えた影響は決して勘くなくない。著者が本書を通じて中日庚申信仰の全貌を総合的に纏めあげ、私共の前に示された事は、従来

これに比すべき研究が全く存在しなかっただけに、殊更吾々の羨びは大きなものがあるのである。

最後に一読して気附かされた二三の点を記すならば、まづ第一に同一資料の解釈が本書の内部において、づれ、を生じている点に突当る。言葉じりを捉える結果になることを懼れるが、著者が個人的に行われる庚申待の事例を以て、中国の守庚申との関係を立てられる際に、現在そのような庚申待を行っている麻生に曾って講が在ったと見られるのか（三一頁）無かつたと見られるのか明らかではなく、同じく菅原道真の「庚申夜述所懐」の詩に見える個人的な庚申祭祀を旅行中の例外的事例と見られるのか（一三五頁）或は恒常的事例を見做されるのか（二六一頁）聊か資料解釈の曖昧さが感じられぬでもない。第二は、誤植は極めて僅少であるが、それに近い調査の手違いも少々見当る。例えば著者が都市に於ける庚申講の代表的ケースとして重要視される弘前市富田町の場合、著者の報告の如く、この講と別荘に松森町の講が存在するのではなく、所謂富田町の講中が隣の松森町に股がっているものであり、独立した講を持つと云われている松森町は茂森町の誤りで

ある（二六頁）また北津輕郡の御御既部落は三既の誤りであり（九〇）六四頁に引かれる下前部落採取の庚申諭言「ハ」の行、コウコウニホトコゴはユウコウニホトコゴの手違いである。併し、これらの其は、いづれも筆者と著者とが共同調査を行った事例に關するものであり、筆者自身の協力の不充分を暴露する以外の何ものでもない事を御断りして置く。更に斯様な零細な事柄を敢えて掲げて書評の形式を整えなければならぬのは、筆者自身の管見は兎角、本書がその本筋に於いて、聊かも批判の余地を与えない誠に重厚にして穩当な論旨を以て展開せられてゐるかを言外に示すものとも云い得るのである。

いづれにせよ、本書が日本の学界の輝かしい業績の一つである事は疑いないところであり、今後に長くその光を放ち続ける事であろう。

猶末尾に一言感想を述べる事を許して頂くならば、既に述べた如く、著者は平安時代以来の実に歴大な文献を渉獵、駆使して、庚申信仰の時代的変遷の跡を究明する事に大きな努力を傾注され、優くれた成果を挙げて居られるのであるが、惜しむらくは庚

申信仰の親家的な変遷を跡づけるに止まり、かゝる変遷を導き出す基本的な歴史的諸條件との必然的關連について、何等考慮を払って居られないかの如くである。この其は著者の根本的意図が文化人類学的な文化変容の問題にある限り当然の事でもあり、問題にはならないのであるが、たゞ著者が「庚申信仰」の表題のもとに極めて平易な語調を以って語りかけて居られる一般読者層には、本書がかゝる問題意識に貫かれるだけでなく、庚申信仰の流れの歴史的な背景や宗教史的位づけに關して、もう一歩の配慮がなされる事が望ましかつたのではなからうか。平易な行文の中に著者の敘述に対する苦心の跡を見るが故に、猶更その感じを深くするのである。蛇

足ながら一言感想を附して筆を揃く。

終りに、本書全般の充分な紹介、批評を果しえなかつた事を著者に対し深く謝すると共に、日頃親しく指導、助言を賜つてゐる著者に対し、若し非礼の言辭があれば、備えに寛恕を請う次第である。（一九五七・三・二十八）

（A5上製 三二〇頁 口絵四枚 廿一年十二月 山川出版社発行 定價三四〇円）